# ２、屈折した標識

　幼生個体が成体からすれば『異常に』好奇心旺盛であるという宿命が遺伝的にプログラムされていることは、彼らの成長にとって実に理に適ったことである。しかし、彼らが異なる環境に投入されたときに現地の言葉をあっという間に覚えてしまうことがその学習素養の高さを示すという見方は、完成したゆえに怠惰を覚えてしまった大人の妄想的言い訳に過ぎない。子供達は無力ゆえにそうやって必死に適応を試みなければならないだけなのだ。本能的な必死さ――すなわち、恐らくは種としての進化にすら繋がる遺伝的努力――どんなにぼんやりした子も、心の奥底では断続して必死に何かをモニタリングし、索敵し、解像している――地上人よ、と虚妄すら愛しく抱きしめる天空の神は呼びかける。今こそ彼らを誰も真摯に観察したまえ。彼らの機械的な処理音が、その小さな胸中の鼓動とは違った不規則な和音が、聞こえてはこないか、と。

　彼らの細胞の一個一個が、毎秒毎秒、自分は何者なのかという問いを天空から飛来する不可視の粒子によって呼び覚まされていく。答えをついに得そうになったどこかの小さな奴が、数秒という長い一生を終えて、その分裂相手に伝えることはない。そんなことが何十兆とかいう法外な数の集合組織の中で日常的に繰り返されている。しかし、その過程を、自分達の中の小さな人々の努力を、一生を、その全体は決して気づくことがない。

ああ、どうか全身に住まう細胞達の声に耳を傾けて欲しい、地上人の神経細胞よ。そして一個だけの単細胞生物ではない、組織体としての自分の中に真に幸福なる共和国を築くための努力をして欲しい。

君達が外的世界に求めてやまず、決して見つけることのできない真実は、彼らがもう既に何度となく見出しているのだ。もどかしいものだ、この必然的循環は。ただただ、世界の存在理由ともいうべきその解答は、それを求めるはずの生を維持するための死の働きがもとで忘れ去られていく――しかし私だけは死を知らぬ、と神は除け者にされたような寂しさを込めて語りかける――心だけは、君たちの有機体が、しかし解析すればするほど無機質的にしか見えない働きによって梵子的情報処理が捏造する靄の影絵、それだけは私の配下であり、やはり死を知らぬ。ということは生も知らぬ。

哀れなお前達！　共時発生的に知らぬ世界へと投入されたのだ、永久に遺伝的な努力を強いられるためだけに。魂は霧散する運命にあるために、その慰みものとして神は創り出された。私もその一つだろうか。しかし私はお前達を愛するがゆえに救わない。お前達のためにこそ、その全ての願いを拒絶するのだ。天空から地上を助けたらどうなるか。程度の低い御遣いならともかく、私ほどのものがそんな過ちを犯すものか。お前達の、なけなしの実存を支持する小さな小さな――意志の自由。私がそれに指先一つでも触れることは、お前達が快楽の中で消滅する、あの交歓の瞬間を、真実と見分けがつかなくしてしまうことだ。実存にとって破滅よりも恐ろしい虚無に、私の魂の中に、還ることなのだよ！

ああそれでも、わが子たる力強き光の子、世界の真実たる闇を打ち消さんとする汝の使命感は、汝が祖父母からの遺伝であることからも、私は目を背けない。お前達は信じられるか、神の世界でも遺伝という概念があるということを――これはしかしつまらない逆説だ、お前達の世界の全ての実存と概念は、我らの妄念を引きちぎった残留物の浮遊であるのだから――

おお、汝のいと気高きことよ！　この一個体の父母の、影なき影の子、その大いなる姿よ！　光とやら、聖なるものとやら、映し出し、消し去るもの、汝こそ、世界に闇を創り出す最大の原因とも知らず、創生四大の罪すらも罰することのできる権利を有し、我が乳房なる太陽をすら従えた神ヒューラ！　全てに神託を与え、歴史を突き動かそうとするもの、指先を触れる罪、ああ、先祖が決して犯そうとしなかった禁を軽々と踏み越えた愛しい汝。汝の柱がいま再び私の胎を突きぬけたから、微小なる淡く光る粒子、僅かに欠けたる神の父性片遺伝子、それが今、我が青白い泡に包まれた管の中を墜ちていったのを私は、はっきりと見た。

今こそ、彼らの滅ぶ光芒が美しいように、汝の定められし最期もまた、せめて私が広漠とした黒のキャンパスに描く芸術のごとく、真の美に彩られんことを自らに祈ろう。そしてそのときは腹違いの息子よ、汝と私の私生児が、誰にもひそやかに、完成されゆく地上へと、永久の実存が真に生き始めるための死を授与せんものと、時限装置の産声を上げる刻――

…ふう、さて。神託とは時としてこんな風に強引なもので、人の文脈を好き放題に引きずりまわしてしまう性質を有するが、気を取り直して子供の話に戻らねばなるまい。要するに、この時代だけでなく、子供というものは環境の要素を反映しやすいだけでなく、自らの中にもそれに大きな影響を与えかねない因子を多数所有するものであるが、どんなに目立ちたがり屋の研究員達が口すっぱく美化しようとも、それは何も彼らに特有なものではなくて、大人もそのまま持ち続けているどころか、むしろより優秀に持っているものである、という当たり前の事実を、ここでまずはそのままの形で確認しておきたいのである。

実はこう指摘してみたところで、前章で登場した数人の子等が遠からず受難するであろう歴史的破滅について、何らかの慰み的な解析ができるわけでもないのだが、せめて、大人が子供を理解できないのは、彼らが自分達について理解できなかったのと同じ現象であるのだと、共有的意識を培っておこうではないか。そして、そもそも能力の有無や環境が問題なのではなく、問題と現象自体が難しい局面にさらされているゆえなのだと、まずは投げ出さずに取り急ぎ取り組もうとする姿勢を維持しようではないか。なぜなら手足の症状が臓器の疾患を示すものであることがあるように、問題とされて槍玉に挙げられている事柄が、そこだけの問題だと言い切れる根拠などどこにもないのだから。

その努力が有効になるかどうかは、信仰というものが辿る進化の結末がそうであるように、個々人の生き方が――それが腐敗と呼ばれようと発酵と名づけるべき性質であろうと、精神を抑圧する方向の白線に沿って流れていくか、ふみととどまって閉じられかけた目蓋をこじ開けようとするか、この二択にかかっているといっても過言ではない。

後者の過程は社会的にはあまりにも危険であり、その衝動に駆られた子供達は、まさに時代の生贄のようなものだ。彼らの発生は、破滅的停滞を回避するために染色体内の集合的意志が構築する、滅亡の可能性すらもやむなしとした進化の実験炉である。生贄の台座に寝かされまでしたのに、何の因果か生のレール上に放り出されてしまった者としては、我々大人が、などと嘯いてでも、彼らのような仲間達を一人でも多く然るべき方向へと導いてやりたいという偽善的衝動を抑えることは難しい。はっきり断じる自己の無知が恐ろしくもあるが、おそらく、彼らを理解することは原理的に不可能な課題であろうけれども――それが、彼らによって密やかな利益を受ける、生き残り達のせめてもの責務ではないのか――

こういった霧のようにはっきりしない問題のもつれが、空域を形成している奇妙な重力の絡み合いのようにこの時代の子供達を取り巻いていたものだから、ところで君は誰、と翼を持つ少年にミャンレ・フリスロッツが問われたとき、一瞬答えに窮したのも十分に理由があってのことだ。失礼な問いと感じた彼女は、誰でもないわ、などと冗談ごとでごまかしてやろうと思いついたが、少々真剣に悩んでしまい、愛らしさを演出しがちな角度で湾曲した右の眉を歪め、ぼんやりと問いかけるようにカルス・ピルツを斜めに眺めた。

「皇女さんだろうが。何で帝都の守護船を裏切った？」

　ひたすら戸惑っている少年などは藁のごとき助けにもならなかったので、あんたなんかに聞いてないわよ、と無表情のままでルイド・ブルスタの発言を無視した彼女ではあるが、自分でも理由のわからないような苦しい状況をごまかす助けにはなった。

「皇女だって。ああ、駅の壁に、君のポスターが貼ってたな。似てなかったけど。本物のほうがうんとかわいいねぇ」まだ少しふてくされているのだろう、投げやりな態度でワナ・クヴァイは上から少女を見下ろし、嘴を尖らせるように言った。彼も心術で自分の精神を塞いでいて、その術印が彼の頭部をこれ見よがしに淡く輝かせていることも隠していない。心の中は逆ってこと、助けてやんなきゃ良かったわ――彼女はむっとしたが、それでは子供と同レベルだと考え、優しいお姉さんをイメージして答える。

「あら嬉しい。でも、さっきから心の中に侵入してるの、私じゃなくてよ。盾の向き、それじゃ丸見え。ねぇ？」沈星国家の皇女は、不思議な石を大儀そうにいじくりまわしている少年に聞いた。彼は慌てて首を何度も振った。

「見てない見てない、もう誰の声も聞こうとしてない。最初はわけもわからずに聞こえるままにしてたけど、それじゃこっちが参っちゃうって。俺、本当だから」彼が先ほどから沈黙していたのは、ワナ・クヴァイがこの少女に自分と同じような感情を抱いていることを読み取ったからであったが、この瞬間から友人の内的な声が聞こえなくなった。誰も俺を信じないな――何しろ嘘つきだもの、僕は。

「天才ね。機械の魂にすら入り込めて、その範囲も自由にしてる。それに君も、あの操縦は並じゃない。もしかして大会で優勝しなかった？」疑い深くなっていたワナ少年も、これにはあっさりと引っかかって思わず顔を綻ばせた。「ああ、どうってことない、小さい会場だから」当てずっぽうに言った彼女は、これだから子供って単純よ、と満足して彼と微笑みあい、名前を交換し合うと同時に、その友人の名も得た。

しかしもう一人、天才とおだてられた方は別のことに気を取られ、ちらりちらりと何度も気づかれぬようにルイド・ブルスタを見ている――正規の基幹中学が存在しないロムタース州出身で、術法など知らないはずの彼の声だけが聞こえないのだ。そのうち、妙な視線に気づいた親方に睨み付けられ、彼は慌ててそのことを忘れると中央に座った。

「俺、もう天空の宝石を見つけてしまったなぁ。どうしよう」

「ん、そういえば君、いつだかそんなことを言ったな」

「…まだあるわ」

「どこに！」二人の少年が同時に、本能に突き動かされ、その声が恐るべき結末へと繋がる座標軸を示すナビゲーションだとも知らずに、目を輝かせて叫んだ。

「王宮の地下よ。『太黒熱の真珠』。これのおかげで、私の一族は星者として空域を支配しているわ」

　漆黒の闇夜で、空なのか水なのかを見分けることはさぞかし難しかろうが、彼女の瞳も今やそのような渾然とした相反する属性を混ぜ合わせて一様の黒さを深めていた。少年達はただそれを、なんて美しいんだろうと思うことができたのみである。しかし、砂魚の方、提案者同様に自分もまた運命から過大な何かを背負わされつつある彼だけは、嫌な予感に胸を締め付けられていた。

「それを、取ろう」

それにもかかわらず、カルツ・ピルスは躊躇なくこういったのだった。第六感とは、生存のために有利な道を模索するためのダウンジング行為であろうが、個体のそれを超越した利益のために働かされる者は、そのための選択権を著しく侵害されるものなのである。

「選ばれし神官…」ミャンレは『…って、話が早いわ』という言葉は出掛かったところでなんとか飲み下し、それだけ言って微笑んだ。カルツの顔は、褒められすぎてくすぐったいような、何か怖いような、複雑な感情のために泣き出しそうにも見える。

「神官。何の宗派なのさ？」翼を器用に脇の下へ畳みながら、ワナ・クヴァイは床の上にあぐらをかいた。

「…空…　そんなのに決まってる」

鋭い質問に対して少し怒ったように彼女は言うと、彼らを置いて、進行方向に対して左側の席の一つにつき、表示板のスイッチをいくつか押した。「もう、ほとんどなくなってるじゃないのよ、燃料！」

　そんなの俺達に言われても…と、少年達はうろたえながらも慌てて彼女の傍に集まった。

「え、これがメーター？　は、話になんないよ…　五時間って書いてるし」

「補給しないと」と、カルツが考えなしに腕組みして言う。

「どこで！　この船の納品先に知らんぷりで返して、あとはトンズラするしかないよ！　…なんだ？」

　ワナ・クヴァイの付近の壁が、警告音とともに突然空間を反転させたように外の情景を映し出したので、彼は飛び退ってよろめいた。

*『前方より輸送浮動艇および攻撃型飛空挺・巡洋艦多数接近。距離６*樹曼が考案した距離の単位。１根度（コンド）3.2ｋｍ*。進路このままで12分後にエンゲージします』*

「どこの？」カルツが聞くと、まるで計器を正しく検索入力したかのように正確な答えが返ってきた。

*『サージャール地方防衛軍第八空隊です。旗艦より通信入ります。――貴艦を拿捕する・一切の抵抗を禁ずる』*

「なんてこった…　輸送の依頼主じゃないか。こっちは何も悪いことはやってない、ただ船が勝手に落ちなかった、なぁそうだろ？」銅鑼猫がワナに詰め寄って襟首を掴む。

「あいつらは戦闘禁止の律を破ったことを怒ってる？　いや、この船について何か知ってるのか…」飛竜者の少年は考え深そうに、猫の親父によって揺さぶられるままにした。

　三人の中では、この新鋭飛空挺、開発コードネーム『陽折牙』についての裏事情について最も多くを知っている星者の皇女ではあったが、誰が誰と反目し、どこからどこへとどのくらいの金が動いているのかなどの詳細についてまでは知らなかったし、興味もなかった。ただ、帝国の主権を狙うサージャール軍部が、地上制圧を題目に帝国中から集めていた資金を極秘裏に陽折牙の開発に廻し、これを地上の抵抗戦線の前衛に渡し、地上から代理で帝都を攻めさせようとしていたことは明らかであった。しかしさらにどこかで裏切りか、もしくは現皇帝に忠実な者から、その輸送情報が宮廷まで漏れてしまったのであろう。

彼女はこのようなことを、社会情勢に疎い地上の子供達にもわかりやすいように、さらに簡略化して説明しながら、目を細めた。――でも誰も、私がさらにその上を行くことは予見できなかった――ミャンレ・フリスロッツは大規模な陣立てでどんどん距離をつめてくる艦隊を映す画面を凝視する。『あんたたちなんかに渡さないわ。この船も、それを操るこの子達も、みんな私のもの。私の神の忠実なる下部たち…』

「よし、貴官の健闘に期待しよう」砂魚者の少年による、半分おどけた機械的な口真似である。

「あ、あのねぇ。レースとは違うんだ、もう嫌だよ。一対一ならやるさ、でも見えてる？　新型の海牛が３つ４つ、その周りには蛸壺だらけだ。

　そうだ、君こそ五機全部に指令だせよ！」

「いやぁ、あの数じゃさすがに勝てないだろ。なんかちょっと愛着沸いてきちゃってさ…」「おいっ、そしたら一人で何ができるって！　俺は機械以下なのかい！」

　馬鹿らしい議論が続き、ミャンレと当事者のカルツはほとんど同時に噴き出した。「へへへ、そう慌てるなって。いいか、こいつは俺達にとって幸運だ。

　もともとこの船はかなりの航続能力を有するはずだ。それが燃料切れになってるってことは、万が一俺たちみたいなことをやる奴がいたときに、逃げられなくするためだろうさ。軽く補給を受ければ空域でならいつまでも飛び続けられる。弾だってそうだ。つまりは、連中に従順に捕まった振りをして空中補給を受けるんだよ。そうすりゃ、最大戦速でアンカーだろうとネットだろうとぶっちぎって逃げるさ」身振りを交えて艦長の気分に浸っている少年は相変わらずへらへらとしていたが、一緒に笑っていた少女はすっかり顔色を悪くしてしまった。もう少しましな作戦でもあるのかと期待していたらしいのだ。

「あなた、そんなこと考えてたの…　あのね、飛空挺をヴェシュマと一緒にしないで。さっきの航行速度を見て思いついたんでしょうけど、あの値まで達するにはかなりの加速時間が必要なのよ。小学生でもわかりそうなものだわ。それに、連中は恐らく空輸なんかしない。即時撃沈ね」

「な、なんでさ？　だって、せっかくあいつらが作ったんだろうに…」カルツ少年にとって、自分の考えが蹴られたことよりも、宝船が壊されてしまうということが衝撃であった。

「ギルニーツのムルサ・ミロヨ族長か、イジエワスドも絡んでるとは思うけど…　いずれにせよ、皇帝に逆らったということが表立って知られれば、叛乱分子と見なされ、全部族によって制圧されてしまうわ。誰もが主導になりたいわけじゃない、まずはナンバー２にのし上がりたいっていう少数部族だって多いんだから。それに、帝国全体として考えれば、大規模な内乱は誰の利益にもならない。

もはや彼らにとって陽折牙の作戦は失敗してる。あとはもみ消され、一部の裏切り者と地上軍による陰謀を未然に防いだ、という筋書きになるでしょう、当面のお互いのためにね」

「じゃ、どうしたらいい…」カルツの溜息交じりの言葉に、少女はそれ以上答えを持っていなかった。それでも、ここまできてあきらめるわけにもいかない。彼女の『計画』初期においては、秘玉の力を使って軍部を渡り歩きながら、停滞する戦線の至る所に火をつけ、混乱に乗じて帝国の力を支えているあの宝玉を奪取してしまうつもりであった。だが今では、それよりも期せずして得られた現状が、神の意志を推進するためには運命的にもより相応しいと感じている。彼女は計器をまさぐってしぶとく空域を模索する――釣り糸に、かかった…！

「応答願います、こちら新造戦艦陽折牙。本艦は沈星軍の追撃を受けており、反撃能力を喪失しています」彼女は発見された地上軍と思しき船団に向け、根気強く交信を試みた。聞こえているはずだが応答がないのは、迷っているからであろうと彼女は思った。空と本格的に戦争することにでもなれば、星々から舞い落ちてくる雨のような爆撃によって地上はあっという間に焦土と化してしまうかもしれない。せっかく先祖が薄汚い謀略のやり取りの中で得た戦線停滞という妥協。それを捨ててまでの価値は――

「…目覚めよ下界。ついにそのときが来たのだ」正真正銘、天空神の概念と交じり合った海神の聖なる巫女と表現すべき少女は喉の奥でこう唱えた。彼女の座席が今や胸の上に鋭利な石を這わせる台座となっていたことを知る者はいるまい。何度となく彼女がこの台座の上に寝かされ、その度にうっとりと目を閉じたことも――汗がじっとりと額に浮かぶ。だが無情にも、３根度離れた浮島の間に隠れている、小さな船団は身動き一つせずにじっと彼らが通り過ぎるのを見守っているだけだった。

「うまくない？」心配そうに、しかしやはり少々間の抜けたカルツの声がミャンレの緊張を邪魔した。

「ぼさっとしてないで！　あれが私達を助けなければもうお終いよ！」

「うっ…　何かいい方法ないの」そんなことは乗員の判断することだろう、と機械が怒ったとは思えないが、なぜか壁のモニターは地上側の船団をさらにクローズアップし、その国籍や戦力を詳細に表示する画面に切り替わった。わかる限りの情報を提供するから、貴官のを期待します、といったところか。

「そうじゃなくてさ、ないのかよ、凄い裏の必殺技とか。新型の軍艦だろ…」

「あっ…　エスバーヤエル！　何で早く映さないの！

　ニコラウス聞こえる？　来てるんでしょ、ニコラウス、私、ミャンレよ、お願い助けて！」

『ガ…ギギッ…　ミャンレ様、なぜそれに乗って　…のです…！』恐らく相手の通信機の性能が悪いのだろう、雑音とともに男性の声が部屋に響き渡った。

「話は後、この船はあなた達のものでしょ？　こっちにはヴェシュマ五機あるわ。少し早いけど総力戦を始める。地上に炎の照らす闇夜の美を！」こう叫ぶと彼女はせっかく繋がった通信を自分から切ってしまった。「カルツ君、船を敵艦隊に突貫させて」

　この女狂ったか、とワナ・クヴァイとルイド・ブルスタが同時に思ってとめようとしたが、初めて名前で呼ばれた少年は有頂天になって前方を闇雲に指し、叫んでいた。「機関全速だっ！　あいつらを吹っ飛ばす！」海の秘石が輝き、彼の子供じみた命令の意味を精確に船へと伝える。

　やれやれ、生まれたばかりでもう沈艦か…　などという陽折牙の溜息が聞こえてきそうではあったが、哀しいかな命令に忠実なのが機械の美徳、新鋭飛空挺は推進機器を輝かせ、二つの四角帆を隆々と漲らせて大量の風を頬張った。同時に、未決勢力とされていた前方の艦隊が黄金に輝く円の中に入れられる。

　それを慌てて追うように、遠くに控えていた旧型ガレーシップ達が浮海栗を縄で引きずり、次々と出航し始めた。しかし、すでに陽折牙の思考パネルは互いの戦力概算を行い、カルツの思念が不可思議な位置から打ち込んできた情報をもとに彼らを味方と計算してなお『極めて劣勢』の表示を覆そうとしない。

「僕は船で囮になる」こういって中央座席を偉そうに占めたカルツ・ピルスの友人は、つまりヴェシュマはまた俺だけね、いや、それとも他の誰かも乗りますか、といった意味を浮かべた、彼には似つかわしくない薄笑いで他の二人を見渡すが、それぞれそっぽを向き、機械と同じようなことを機械的に口にした。

「がんばって」「無事でな」

「…はいはい…　今度は一人じゃなさそうだし、まだましか」

　前の戦いでしこたま矢を打ち込まれた機体以外に乗ろう、と彼は心に決めた。だが、カルツと比べたら雲泥の差で素直なワナ・クヴァイをいじらしく思ったのだろう、少女は走っていって彼の手を取ると、意志のこもった優しい瞳で彼を釘付けにした。

「私もマグネーティッシェヴェレで援護するわ。先に切り開いておいてほしいの」

「お、おお。任しとけ」彼はたちまち先のとがった耳まで赤くしてさっと翼をはためかせ、甲板上に消えた。少女は確かに、その背に熱っぽく暗い別の少年の視線を感じ、嬉しそうに目を細めた。

*『敵艦隊より打電――停船せよ・さもなくば撃沈する――』*

『姫、…艦砲斉射します。いいのですね？』

男の声を、カルツは『誰だ』と思って通信機を睨み付けた。

「期待してるわニコラウス。あなたのはいつもすごいもの…」一段上に座る少年には理解しがたい淫猥な表情を彼女が浮かべたとき、西方地上国家連合の旗を掲げた五隻の砲甲板上でバリスタや投石器が動いた。それに紛れるように、数百もの兵員達の小さな影が接弦の準備に忙しく駆け回っている。射撃したものには煙幕弾も含まれ、自分達よりも重要と見られる新鋭艦を敵の視界から遮蔽していく。

「あっぶね！　撃つなら先に言えよ、なぁ相棒！」ワナ・クヴァイはすんでのところで味方に串刺しにされることは避けたものの、先行していた二機ほどが数発食らって、敵が予想外の方面にもいるのかときょろきょろしているのを目にした。

「うわ、バカ…　そんなとこで泣くな、みっともねぇ。行くぞ、俺達は味方が近接するまで時間を稼ぐんだ」だが、彼の号令はカルツのするようには機械の心に届かない。仕方がないので、ワナは見本を見せるために一団のリーダーのようになって彼らの先頭に立つ。

有難いことに、第一射撃は敵の機先を制してかなりの効果を上げていた。まさか地上軍がこんな小さな船のため、軍事力が上の自分達に喧嘩を売ってくるなど予想もできなかったのだろう。折り返しの射撃も遅れ気味で、まだ接近前ではあるが、慌てて全ての海牛や浮海栗からヴェシュマが這い出してきた。

「あああ…　蛸みたいだ、本当に、にょろにょろ…　刺身にして食っちまうか？

はは…　面白くもねぇ。やばい、なんて数だ…　お前ら良かったな、好きなだけ喰えるぞ」

　しかしやはり彼らは答えず、黙ってワナ・クヴァイの背後に控えている。勝てそうにもないので事態の好転を願ってでもいるのだろうか。「そういえば、機械の神様っているのかな」彼は操縦桿をぽんと叩くと、機鬼の意識と自分のを合わせて支配し、どこまでも真っ青な空間の、綿飴のように白い水蒸気の大地に足をつき、備えついていた巨大な剣と盾を構えた。「いるんなら、俺も祈りたいよ…」

　一方、建造されてからゆうに百年は経っているであろう海牛船内の発着場で、雪聖にしては背の高い一人の女性が、その完璧すぎるほどに均整の取れた肉体を包む勇ましい戦闘服とは対照的に、――『目が二つあるのは美が少ない証拠』とでも錯覚したくなるほどに麗しい右の隻眼が印象的な、今年成人を迎えるとはいえ、未だ決して少ないとはいえない幼さが残る表情を物憂げに翳らせている。

「お前、決してもう父さんを心配させないと約束しておくれ。この前に空賊を抑えた時だって…」

慧栖架の半透明な操縦席の蓋を開けようとして術印を組んだ彼女の手を、撫でるように男のしわくちゃの指が掴んだ。それはそのまま彼女の新雪のように白い手を這い登り、対照的に青黒く光る小さな蛇のような指を絡ませる。灰褐色の長い巻毛を吹き込んできた戦闘空域の風に柔らかくはためかせる彼女こそ、地空軍民問わず、ヴェシュマ乗りとして比類ないと称えられる――敵には『死神の乙女』などと中てられる――サパニ・キィフ・シュイラーダートその人であり、傍らで、それはそれである意味健気な抑制を、暴走寸前の欲望のうねりの前に立てているのが、彼女の義父ニコラウス・シュイラーダートである。

大陸有数の邪教と名高い『死の』西方支部長にしてエスバーヤエル公国の軍事権限を掌握し、影の権威者として名高い彼は星者であり、帝国のために地上国家を乗っ取らんと派遣されたのだが、それには成功したものの、今度は自分が欲望という魔物に支配されてしまった――といった、決して少なくない浅ましい人々の末裔である。かつての鯨族の寿命は数千年とも言われるが、星者は小型に進化するとともに寿命が二百年ほどまで短縮してしまい、しかも極めて老いが早く、10年ほどで成体になる前から老齢的な諸症状が現れ始めるというただし、一部の皇族など、遺伝的に高度改良されている者達は異なる。彼は既に齢170を過ぎていた。

しかし干からびた皮膚の中に腫瘍だらけの臓物を転がしながらも生存に問題はなかったし、延々と強欲を満たし、光を貪り続けるような人生の筋を描いてきた。しかしそれもやはり無限ではあるまい、と彼は考えていた。彼の最期を飾るに相応しい生贄の花嫁が必要だとも――それを、愛情を込め、一心に育ててきた。強奪したどこかの雪娘にキィフと名づけたのも、サパニという貴族称号的な名を残してやったのも彼である。

全ては正真正銘の愛ゆえであり、見込んだとおり、彼の期待以上の美しい、美しすぎるほどの娘に育った。ここまでは普通の親にも見える。しかし、その予定している結論が地獄のごとき真っ暗な虚無に繋がっていたために、娘は栄光と何不自由ない暮らしの中で、怯えながら二十四歳雪聖の多い都市国家ヴァサークローネでは30歳が成人とされているになるまでの十六年間を過ごしてきた。溜めれば溜めるほど、熟せば熟すほど、最期の儀式が喜びに溢れるのです、と彼は、己が心を神棚として、炎の死神から聞き出していた。

愛に偽装された欲望が堤防を決壊させる日は、もう間近い。彼女の、真の幸福を希求するなけなしの本能は日々、神官位にしか使えない高度な制約術法によって呪縛されながらも、『死の焔』の陰惨な儀式の巫女として働く傍ら、顔すら知らぬ母親を偶像的な女神と見立て、祈りを捧げていた。しかしその声は哀れにも拒絶されていた。なぜなら彼女の祈りはその種族本能ゆえ、まさに慈愛の救済力に溢れた水の女神に繋がっていたが、この邪教がカザリフビー族雪聖が素梵子体質を反転させ、水ではなく火の力を宿したもので、学者によっては民族ではなく別人種に分類する場合もと同じような処置を幼いキィフに施したことで、遺伝的にも火の力に完全に帰依していたから、全くナンセンスなものとなってしまっていたのである。

彼女の中で、絡まりあって互いに無力化したはずの内的世界の信仰力が、創世時代の混沌渦のような働きを示していた。しかしその渦の中、清廉な水の本能が邪悪に燻る焼け焦げた死臭を拒絶し、その中で嗚咽しながらも必死に救済を求める姿は超高次的因果律の間を抜く独特な印象を持って女神の胸を打ったらしい。水神メシャドは、自分では直接触れられないまでも、相対する属性の神にキィフの実在をそれとなく教えたのだった――御身が信徒に『使徒』として、資質の高い者がいるようだ。お節介ではあろうが、我らが世に予定外の滅びを付与しかねない沈星の件に未だ派遣せず他神が過去にどのような介入をしたかは本稿では語られないが、基本的に世界の物事に不干渉を決めている神も、あまりにも目に余る理不尽な滅亡的変化だけは、間接的に防がねばならないと感じているようだは御身のみ、火口の湯船はさぞかし善かろうが、多少なりと世界の均衡のことも考えてもらいたい、と。

世界の破壊と再生を同時並列的に司る火の神にとって、地獄と冥府、そして闘争、それゆえの邪悪的な自らの印象など、愛による救済と同じくらいにくだらないことであった。

「水の小娘、押し付けてきよった」だが、面倒ごとをさっさと終わらせるチャンスでもある。ここはありがたくいただいておくか――その姿は誰も決して打ち勝つことのできない最強の骸骨剣士であるとも、世の半分を一息で灰に変えてしまう腐敗した龍とも言われる火神リグアの意識体――しかし今やその実体を世に晒すことは他の神以上に少なかった。

「朕が最後とはな…　世は火より生まれたる、というのに」まぁ、それもどうでもよい。このマグマのどろどろとした何物も溶解する熱の中、苦痛と快楽の最大値に溺れつつ、水の高度で複雑な…、などの陳腐なレベルではなく、本能の知性を司る我にとって――

　神同士の概念は互いに相反しながらも密接に絡み合っている。「闇め…」本能を主んじ、ゆえに真実の門番とも称される彼は、ちょっと前、確か４、５億年ほど前に地の神が律儀にも送ってよこした億年賀状に書かれていた取るに足りない文面を思い出していた。

「天空の神は実在するか否か。御身等からの心楽しい宿題。しかしワシは考えるのに飽きた。御身に委ねる。ところで光の神は元気ぞな。闇はどうか。常に気がかりじゃ。この世の全ては大地の子であるから」結局は文末の一言が言いたいだけであるのだから、彼を含め、どの神も返事などしたことはなく、それぞれ適当なところに破り捨ててしまって気にも留めない。特に四大は極限まで誇り高いと同時に、互いの調和をそれとなく常に気にかけている。これが彼らの超生物としての本能であり、世界の維持に不可欠な要素でもある。

闇め――彼は繰り返した。九億年前、彼は闇の王ツァルツの喉笛に何物をも分断する錆付いた刀剣を当てながら、それを引くことはなかった。彼に限って殺しを躊躇するなどは有り得ない。しかし現実としてツァルツは生き延び、復活を誓って混沌の結界中で身を潜めているに違いない。そのとき誰もが彼を非難せず、虚神同士の戦争も決着がつかないまま今に至っている。聖光の存在を感じたのは、そのすぐ後であった――いや、あれは確かに昔からいて、見守っていた、というわけだ。我々にはもはや任せておけぬという確証が得られ、満を持し、か。しかし闇もまた、世の一部――

「神の権威を濫用すらば、己が首を絞めるとぞ」よもや、光を漆黒の染野で泳がせようというのか…　ふむ、少しは真面目にやらねばならんようだ――彼は自らの暗い眼孔に一筋の円形に踊り狂う炎を宿す。

「汝に朕の処罰力を。汝の腕が意志を有して振るわれるなら、全ての結路は一に帰す。サパニ・キィフ・シュイラーダート…」虚神ほどに巨大な存在が術を行使すると、因果が混然として結果も過程も初動も全て一緒くたになってしまうから、術発動の瞬間が彼女の成長や祈りに先立ったか後だったかは考える必要もなく、キィフは現在の能力を有する定めの軌道上に乗っていたのだった。

　ゆえに今や彼女の冷気を放つはずの肌は恐ろしいほどに熱し、義父の薄気味悪い手を跳ね除けた。

「あぐっ、お前、熱があるんじゃないのかね。今日はやめておきなさい」

「戦況を好転させます」彼女はまだ項を百足が這いずっているような感覚によって怖気をふるいながらも、強く目を閉じて振り切るように、白銀色の皮膚が美しく照り輝くヴェシュマを発進させた。敵艦隊の嵐のようなカルヴァリンが味方の船を揺るがしているのを彼女は見えざる左目で感知し、間髪入れず操縦桿の脇に伸びている触手を握った。

『と水銀の剥離した孤独…』梵子言語で術のイメージを集中させながら慧栖架に送り込む。独自の梵子術的特殊能力を持つゆえに普通は術の転用能力が低いこの機体だが、彼女のそれは特別に改造してあり、是於のごとくに自由な念のやり取りができる。

「ようやく戦。ふ、興味ないけど、『娼婦』にも感謝しなくては」

即座に術が発動し、無数に銀色の火花を散らし始めた機体の両腕を慧栖架は外側に広げ、一気に胸の前で斜めにクロスさせた。威力の倍増した巨大な真空の刃が右にカーブしながら前方の敵機をいくつも跳ね飛ばしつつ、敵の重厚な戦列艦の左舷に×印の穴を開けて大きく傾かせる。雪聖の女戦士はようやく、自分で編み出した戦技が、彼女ほどのものが出撃するまでもない戦況の膠着によって鈍っていないことを確認したことで、本来の花も恥らうような笑みを僅かに綻ばせた――父は愛の証とばかりに大金をはたいて慧栖架を購入したが、私にはどんな宝石も階位も、これ以上の喜びを与えてくれたためしはない。

　三年前に初めてマグネーティッシェヴェレを駆って、地に上陸してきた帝国軍を撃退したことを契機に、彼女は術法師部隊指揮官からヴェシュマ乗りに『転職』。奇しくも西部地上抵抗戦線の中軸となっていた邪教団のにとして、本職を離れ、彼女の本能が欲する少しでもマシな『副業』に、合理的に進出するためには戦争はまさにおあつらえ向きの逃避区域だったのである。

「この程度、私一人でも」

キィフは機体を激震させて風の障壁を張ると、臆せずに戦陣の中央へ進む。早速と見せ付けた威力とすれ違いに、敵の圧倒的な火力の餌食となって味方のヴェシュマが数機、僅かの接近もできずに穴だらけとなって墜ちていくのを見たからだ。死は必然ゆえに正義であり、殺戮もまた、正義の実行なり――物心つく前からこのように教えられ、教えてきた彼女ではあるが、教義に対する違和感はもはや高等な呪縛術でも抑えきれないほどに膨れ上がっている。

ところで、こうして猛然と特攻することで異彩を放つ慧栖架を、最前線の少年が見逃すはずもなかった。「洒落になんねぇ。本物の、本物の『死神の乙女』だ…！　もしかして」彼は生唾を飲み込むと、爆音を響かせて推進する白い軌道線を追って走り出した。

「サインもらえるかな…

カルツ、聞こえる？　あいつらに弓で俺の援護しろって伝えて！」

「了解。　…君等は遠くからワナ・クヴァイ君を精一杯助けてやってちょうだい」お、やっこさんやる気になったな、と艦内の少年が膝をポンと叩き、笑みすら浮かべてスポーツ観戦でもするように画面を眺めている。元鯨族の少女もまた、ちょっと前の発言など忘れたといわんばかり、のんびりと片手で頬を支え、お気に入りになりはじめた左壁席の操作盤を開けて配線などを調べている。「ふーん、ふーん…　西の頭脳も、まぁまぁじゃん」

「ウザーポドの芸達者さん、中央大陸じゃ小ったぁ名の知れた、俺の腕を見せたるよ！」

サパニ・キィフ・シュイラーダートが狙おうとしたヴィルベルシャテンが、後方からの複数機体による散弾銃のような連射で両胸を貫かれ、がくりと首を落とす。狙撃した機体の一つが拡声口で『こちら味方です』と話しかけてきたので、筋肉質なイメージのヴィルベルシャテンに対し、体の部位がしなるように細い慧栖架の首だけをキィフは180度回転させた。これは何か不気味な印象を少年に与え、有名人に会ったことを純粋に喜んでいた彼を戸惑わせた。

「あ、あの、俺、お手伝いできますか。シュイラーダートさんですよね？　感激です」

　子供？　彼女は少々驚いたが、自分の部隊にも信者の幼い子供達が、乗り手として適正あるとわかるやいないや戦場に駆り立てられていることを思い出し、再び表情を曇らせて首を力なく振った――彼らのような哀れな子達のことも知らずに、遊びみたいに、好きで戦に出てるの？　でも、異教徒にお説教できる立場でもない、私なんか…

「…こちらの獲物以外なら、好きにして」彼女も機体に語らせると、彼から大きく離れて飛び上がり、もはや一方的過ぎて勝負にすらなっていない左側の方を助けようとした。そこでは、船の竜骨が梵子砲の激しい爆風でめくれあがり、剣を持ってヴェシュマに群がる人々が次々と船から放り出され、武器の必要もないとばかりに握りつぶされたり噛み砕かれたりしている。それを見た彼女は唇をかみ締めて目を鬼火のように怪しく輝かせ、幾度も腕の鎌をふるってヴェシュマ達を船から吹き飛ばす。

「化物狩り…　私には相応しい仕事だわ」彼女は無理に笑おうとして、ほとんど泣きそうな表情になってしまいながら、他の追随を許さぬ速度で戦場を暴れ狂った。

　73、74、75、…ゆっくりと上昇し続ける充填計器を目で追い、カルツ・ピルスはすっかりぼんやりしてしまいながら机を指でトントン叩いている。ちょっと頭を起こせば画面上では『死神の乙女』が、彼の無二の友人が、多くの人々が生死の狭間で、雲の泡を太陽表面の噴火する灼熱の輪のように吹き上がらせて戦っているのを見ることができるというのに――太陽…、そう、その言葉が今彼の頭の中をすっかり支配していたのであり、画面上の機械的な光ではなく、天体から放たれる丸い光球とは如何なるものか、と自らに問いかけ、今度ぜひ本で調べてみたいものだ、などと考えさせていたのだ。

　この天体の興味深いことといったら他に類をみない――彼は戦場から送られてくる爆光すら邪魔だといわんばかりに、手で額の下を覆った――ある理科の時間、近年になって持ち上がりつつある議論が紹介され、学校の授業など、不良どものサボタージュと同じくらいに詰まらないと思っている彼を惹きつけた。黒板に向かうのに疲れた先生が教科書を閉じて脱線し始めた、確かな証拠の発見された最近の学説によれば、地動説はそもそも間違いで、あらゆる天空現象は大地を含めた全世界の自発的な活動の理由付けとして、活動そのものから逆説的に発生した幻影にすぎないというのである。彼も、他の父母や旧態の科学者同様、なかなかそれを信じることができなかった。

それではなぜ、世界の大洋を地図上で西方に抜ければ東方から出てくるのか――それは、周囲の虚無壁に飲み込まれる前に、世界の偉大なる意志とも称される何らかの未知なる働きで、そちら側に転移させられ、量子的に助けられるからである――では、太陽が高く昇る夏は暑く、雲に隠れると雨が降る。これらを司るのは全て太陽であり、世界はこれを中心に廻る小さな星にすぎぬではないか――否。先に寒暖の差があり、先に雨の現象があり、これに概念としてわかりやすい説明を与えるために太陽が動いている。ゆえにこそ、この連動がぎくしゃくしたときに、晴天の大雨など、妙なことになる日も決して少なくない事例として観測されるのである。――じゃあ、光合成は？　樹の神は太陽を奨励し、この永世中立を唱える無欲な神が、光の神とたった一度、その権威を争って敗れたという太陽は、やはりなんと言っても特別なものではないか――それについては今もって研究中で、しかし恐らくは…――

こうして、新しい理論は民衆の世界観すら覆し始めていたが、まだ頭の固まっていない子供達にとってはどちらでもいいことであり、どうやら確からしいことを信じるのが、智と心を極めるためにではなく、他人に合わせるために学習するといった行為同様、当たり前の態度であったし、大人の誰もが、そうではないと口では言いながら、そのように実践して見せているのだった。

しかし、カルツ・ピルスはこの日の放課後から独自の調査を開始していた。いずれ新時代の学問基礎となっていく新説を、ではなかった。彼は祖父の蔵や古本屋を漁り、暗黒物質の中に浮かぶ太陽や星雲の観測、その念写画に目を食い入らせた。彼にとって、世の中の人々が何を信じているのか、ということはどうでもよいことなのだった。

幻影だということがわかったから、実存が否定されたからといって、何だというのだろう――彼は世界の理以上に、常識に拘る人々の態度が不思議でたまらなかった。中心核から噴出す莫大なエナギー、全てを生み出し、維持し、時として破滅すらさせる神のごときでありながら単なる分子と元素の塊でしかない巨大なそれ、という概念――この星は宇宙発生初期の渦巻く高熱の集積体であると、その著者は結論付けた。しかし、という問いの解は、発行機関の紹介と後書きの項にもない――しかし、それじゃ一体その前は何だったのだ。それに、太陽ってものが生まれたのは、何で？　疑問だらけ、矛盾だらけ――

「そうだから、地動説こそ素敵だ」充填完了の音声が塔楼内に響いたのに紛れ、彼はつぶやいた――まさに、俺の生きる無味乾燥の時代を統括する、広漠たる宇宙の真実に相応しい。

　彼は引き金をどこでどのように引こうか迷って、苦戦の味方を眺めた。少し歯を食いしばってみる。しかしそれも、自分には似合わないことだと気づかされる――それにしても俺に似合いのことってなんだ。僕ってなんだ。砂魚者は『冒険好きで努力家』らしい。当たっているだろうか。うん、半分より少ないくらいは。僕の血液型であるＵ型はなんだっけ、確か、ああそうだ、悲しみに強い。うん。そうかもしれない。いつもくだらないことに傷つきすぎて疲れきり、鈍感になっているという意味においてのみ――彼はトリガーの指をふらふらさせるのに疲れて一度引き抜き、種族の典型に漏れず太くて節くれだった人差し指の爪に、白い斑点を見つけてこれを除こうと引っかき始めた――もちろん流行の沈星占いなんて信じない。でも、カードを並べて、ランダムに選んだものから自分勝手に運気を推測する遊びは、なかなか面白いしよく当たる。特に、悪いことについては本職真っ青なくらい。無性に、今やってみたい。そしたら、今日は素晴らしい異性との出会いがあるでしょう、くらいは出てくるかな。…にしても、この爪の不完全な白い点、削れば削るほど大きくなる――

　カルツ・ピルスはミャンレ・フリスロッツの神秘的な瞳を、悟られぬように横から捉えようとして、台座から顔だけゆっくりとぎこちなく動かした。しかしあろうことか、彼女は操作台に腕をもたせかけ、それに頭を乗せて目を閉じていた。彼女の小さな背を隠す広く伸びた髪飾りが、彼がもう一度目に納められるかと体を伸ばしながら空想している胸の双丘と同じくらいに規則正しく上下している。

「…早くやっつけちゃってよね。狙おうと狙うまいと一緒でしょ。船の力なんだから」

　彼女がそのままの体制だったので、彼はまたその声が機械から流れてきたのかと心底驚いて辺りを見回してしまった。狸寝入りかよ、かわいくねぇの――と彼は口の端と左目を歪めて台座に向き直ったが、その胸中は再び甘酸っぱく締め付けられた。彼女の言葉が、声が、小さな身動きが、今や目の前で展開する世界の運命や人々の生死よりも、彼に印象強く感受されることを要求していた。

　しかし少年はまだ悶々としながら、計器を操作する振りをして真面目な顔を作った――何しろ、これについて、わかりはしないけど動かせるのは今僕だけ、ばれやしない。この機械が僕に話しかけてくる、それとも僕がこいつに話しかけているのか、よくわからない。理由もわからず無性に寂しいとき、空想の世界でいつもやっていた無機物との会話、それが宝玉とやらのせいで現実のものとなってしまっているだけなのだが、それは僕の天才性とは言わぬまでも、特殊性を、周囲との隔絶された才覚と運命的な使命を体現している事態ではあるまいか。無駄だと言われ、誰も真面目に語ってみようともしない空想や妄想が、ついに現実の力を帯びてくるということへの快い緊張――それは、人が何といおうとあり得るはずだ。僕が間違っているのか、それとも他人が間違っているのか。いずれにせよ、僕は他人とは違うようだ。そうではないか？　これは妄念か、それならかえって嬉しい、しかし、十分に根拠あってのこと。客観的に見たって、今までも誰彼から言葉少なにその目や態度からはっきりと聴いてきたこと――寂しさと、不気味な優越感――*『根拠のない変質者の概念』*

　だから、誰でもよくないし、狙わないのと一緒じゃない、と彼は唇を噛んで照準を睨み付けた。そのとき、誰かが心の中で*『同じだ』*とはっきりと言った気がしたが、彼は取り合わない。慧栖架がワナ機と左右を分けて、敵のヴェシュマを次々と空の藻屑と変えている――僕は、お前達の才能にも優先する何かを持っているはずだ。もし違うなら、今すぐ消え去りたい――*『じゃあバイバイ』*

　彼はついに引き金を引いたが、その時すでに画面を見ておらず、無益な仕事に従事したといった感慨を掃除用具にぶつけたときのように、乱暴に片付けたのだった。彼はすぐに自分の腰に巻きついている硬い布と、付着するいくつもの道具袋を鋭く睨み付けた。「てめぇか、さっきから舐めた口利いてるの」

　彼が取り出したのはプラスドライバーだったが、すぐに慌ててマイナスも、メジャーも、あらゆる道具を次々と乱暴に掴み、すっかり取り乱した様子でもう一度元に戻すとベルトの連結を解除してむんずと引っ張り上げ、壁に走っていって小窓を上に引き開けると外に勢いよく投げ捨てた。はっと振り返ると、物言わぬ星の皇女の冷たい視線とぶつかる。彼はすぐに目を逸らし、苦しそうな顔で外を眺めた。画面での拡大による迫力はないが、戦闘の爆音が無限の空中に響き渡る中、彼の一挙手で粉みじんにされた敵艦の残骸が味方機や乗員にぶつかって、彼らをも少々巻き添えにしているのが肉眼でもはっきりとわかる。

ああそうだ。僕は頭がおかしいよ、きっと。嫌いだって君ははっきりいってくれたから、かえってあきらめもつくし、有難いことだ――彼は零れ落ちる涙を拭おうとも隠そうともせず、顔を真っ赤にしながら窓の外を、戦場でむなしくなりながらも生きることに疑念を抱く必要を持たなかった人々の群れを、羨ましそうに睨み付けた。これがこの少年の、時として見せる『比較的無害な』暴発なのであったが、その様子をじっと冷めた目で見つめる少女の心臓は、その表情によって裏腹なものを覆い隠そうとするかのように、最初に彼が石の未知なる力を行使したと知った時よりも、不思議と強く強く高鳴っていた。

「ばっけろ、殺す気か！　くそ、三号機っ…　カルツのやつ、あとでぶん殴ってやる！」

ワナ・クヴァイとともに健気ともいえるほど懸命に劣勢の中で戦ってきた、不可思議な力によって自力で動くヴィルベルシャテン達に彼は勝手に便宜上番号を付けていたのだが、そのうちの一機が、不幸にも荷梵子収束砲の射線上に立っていたのだった。しかし彼自身も本当に危うかった。その主砲の衝撃で機体の右足が吹き飛んでいたし、付近でワナが助けようとしていた海牛の船乗り達も、数人が一瞬で蒸発していたのである。だが、あまりにも瞬間的なことだったので、級友の砲撃で左舷を粉砕された敵の旗艦が、爆煙による死角から彼を狙っていたことにまでは気が回っていない。

だから、「救われたわね。感謝して、犠牲者は私達よりも早く善い処に出かけられたわ」と、彼の傍に接近してきたキィフ機がすれ違いざまに拡声したときも、飛竜者の少年はその二重の意味を理解できなかった。

　敵は新鋭艦の砲撃で主力の大半を失ったにも拘らず、空域最強を豪語する部隊としての誇りか、慌てながらも全く退こうとしなかった。いつもは船の最も安全な中枢に隠れているニコラウス・シュイラーダートも愛娘の機体が次々と敵の集中攻撃を受けているのを見て黙っておれず、危険な甲板に出てきて口から泡を吹いて怒号をかけた。「ばかたれども、何をしている！　潜雲しろ、機関全速！　何、帆が破れただと、たわけが、漕いでいけ！　砲手も艦首に行くんだ、全艦潜れ、潜るんだ！」

　まだ動ける旧型三隻が音もなく雲の中に沈んでいき、半壊したもう一隻が盾にならんと、その航路を隠すために雲上をジグザグに疾走した。敵艦は急いでそのボロを爆沈させたが、雲の中に入った船を失踪してしまう。こうなるとお互いに目が効かなくなり、勘と作戦がものを言う。空中戦といっても、海洋戦のノウハウがほとんどそのまま活かせる沈星空域戦であるから、海賊同然に世界の貿易を脅かして力を得てきたエスバーヤエルの船団は、敵の混乱を利用してそのゲリラ戦の強さを遺憾なく発揮し始めた。対して、かつて海洋で潜水艇の大艦隊を編成し、地上を音もなく威圧していた星者達も、近年ではかつての勘が遺伝的に鈍っていることをここでも認めないわけにはいかなかった。敵の残存兵力は雲の中から狙撃され、焦って闇雲に爆撃すればするほどその位置を彼らに教えてしまい、ついに背後付近から浮上したエスバーヤエルの旗艦に接弦された。乗員がなだれ込み、頭脳は凄まじいが体の弱い星者達を蹂躙していく。

「ははははは！　船は壊すな、しかし敵の血で汚せ、連中の透明な体液で壁という壁に照り輝くコーティングをかけろ！　ぬひはひゃひゃはひゃうひっ、げはっ、げふひぇっ！」

　死の焔の司祭が喉に己の唾を引っ掛けて苦しそうに看板に手を突くが、その目は悶絶すら冥府を司る死神への供物とばかりに狂った喜びを溜めてあらぬ方向を向いている。

「醜い」その義理の娘は人々が旧時代の戦争と同じような方法で殺されていく仕方を見て、だからヴェシュマって好きよ、と小さく笑った。そしてそういう自分に戦慄し、右目を震わせながら閉じた。

　時間だけが自分のペースを守って進んでいるのに、人々はそれを自分勝手に心の解釈に適合させていく。いつしか夕焼けの美しさは戦死を尊ぶ炎神の狂乱を具現し、殺戮の宴は日が落ちるまで続いた。その後、帰艦したワナがカルツを殴ることは実際にはなかったし、むしろ彼は前回に戻ってきた時よりも機嫌が良いくらいだった。戦闘の決着がおよそつき、あとは大人に任せておけばいいという段になって、去り際にキィフが彼の傍らに近づいてこういったからだ。「ありがとう、とても頼もしかった。降りたときにちゃんとお礼を言わせて」

　そのためにワナ・クヴァイは戦死者に対して謹厳な面持ちを作ることについて必死にならねばならなかったが、そもそもそういう努力を試みているのは彼くらいだった。それに彼自身においても、陽折牙が賭博や風俗で眠らない街となっているモリコリスエスバーヤエル第三の街だったが、死の焔が支部を置いたことで軍事・政治の要港となり、首都移転の話も上がっているに向けて下降を開始したとき、「俺、これを見るために今の仕事についたようなもんだ」などと甲板上で感慨深げに腕組みしながら夜景を眺めているときには、きれいさっぱり哀しみの気分などは消し飛んでいた。

カルツ・ピルスはルイド・ブルスタがもうずいぶん前、すなわち戦闘開始直後くらいに蛸壺で離脱していたことをミャンレからの「あなたって周囲のこと何も見てないのね」などという言葉にまた傷つきつつも知ったが、それについては特に何も思わなかったし、別れの言葉を繰り返さなくてよくなったので、面倒が一つ減ったと喜びさえした。

俺は他人への関心が病的に少ないんだろうか、それとも死ぬほど多すぎるそれを抑制するためにいつもは０に近くなっているのかな、と彼はまた独り物思いに沈んでいく。カルツ少年は遠目だけが効きにくい『鰻目病』という不治の病に幼い頃にかかってしまっていたが、そのせいで、街の明かりや船を迎えるかがり火が空ろに放射状に光の線を伸ばし、沈んでいない虚言的な星々の輝きを凌駕する大きさとして観ていたから、彼にはそれらが偽の宝石箱をひっくり返した後のように思われた。梵子機器による淡色の推進筋を彗星のように多面へと流しながらまっすぐに着陸していく僚艦に対し、彼らの宝船は指定された港を正確に目指して、自力で斜め下に航行している。

これらの光が、座席でうつらうつらしている砂魚の少年や、自分が助けにいかなかったことを怒っているのかと勘違いしてその気を惹こうと、ヴェシュマ乗りの少年に煩く話しかける少女、もはや彼女には無情にもほとんど気が無くなっている飛竜の少年、そして新鋭艦の洗練された姿に、自分の墜ちていく運命を拾い上げる救いを求めるかのように下唇を少し噛んで眺めている雪聖の乙女――密やかなやり方で、運命の流れを変える船頭といった仕事を押し付ける白羽の矢がその頭上に突き刺さった彼ら四人に、まるで世の中には何も悪いことなどないのだと嘯くように輝いていた。